

『革命』と共に生きる



伊藤忠イラン会社 社長 山本 純介

『革命』という、日本人にとっては極めて非日常的な言葉をイラン人は日常会話の中で良く使う。「革命の時、私は大学生だったわ」「あなたはあの革命をどう思う?」「あの革命さえなければね・・・」等々、日常会話の中に『革命』が溢れる。イラン・イスラム革命が起きたのは1979年だから、今50歳以上のイラン人は皆、あの革命の事を良く覚えている。その彼らが日常会話の中で『革命』を口にするのは自然な事だろう。

一方で、日本は革命に乏しい国だが、徳川幕府の崩壊、明治維新が唯一のそれに当たるのではなかろうか。1868年（明治元年）を境に、国の様子が一気に変わってしまう。ただ、それを実際に経験した人はもう一人も残っていないし、人々が日常会話の中でそれを引き合いに出すこともない。日本人にとって『革命』は非日常であり、歴史の教科書の中に閉ざされてしまって久しい。その日本で育った私だが、イラン人と関わって今年で31年になり、その間イラン人の『革命』に生で接し、今ではもうすっかりイラン人と『革命』を談義する様になっている。ここではその内容を皆様に少しでもご紹介できればと思う。

言うまでもないが、『革命』とは非常にラディカルなもので、政権交代といった様な生易しいものではない。革命を境に、服装が変わったり、食べ物が変わったり、1923年のトルコの様に文字までもが変わってしまう事もあり得る。おおよそ文化的に大きな変化が生じる、それが『革命』であろう。そういう『革命』がイランではたったの43年前に起こった。その革命を境にイランは極めて宗教的なイスラム教国になり、それまで市中に蔓延っていた音楽やミニスカートが、一夜にしてコーランとヘジャブに置き換えられたのである。

無論、イラン・イスラム革命もその他の革命と同じ様に、当初はイデオロギーが先行し、あくまでもその結果として文化的な変化が生じたはずだが、イデオロギーは時間と共に色褪せ、文化的な規制だけが色濃く継承されている。昨今報道されている2022年9月以来の反政府運動の直接的な原因は、色褪せたイデオロギーよりも、相変わらず押し付けられる服装だったり、授業だったり、宗教行事だったり、文化的な規制が主だ。新しい文化の担い手、つまり若者が未だに強制されるイスラム文化に反発しているのが、この度の反政府運動の実態であろう。国の文化を変えようとしているのであれば、これはもう立派な『革命』である。

ただ、イランでは先の革命を経験した人が未だ生きているから、話が非常にややこしいのだ。まず挙げられるのは、先の革命をやり遂げ、そしてそれを未だに支持する人たちにとって、次の革命は「反革命」となり、革命が革命を阻止するという状況である。43年前に革命を成し遂げた体制派（この人たちを仮にここではA世代と呼ぼう）が必死で次の革命を阻止する、これは至極自然な現象である。次に挙げられるのは、先の革命をしたけれどもそれをずっと後悔している人達。A世代と同じ、現在65歳くらいの人達である。革命時に既に意志を持った青年であった彼らは、今でも若い世代から後ろ指をさされ、「お前たちがした革命のせいでイランは不幸になった」と非難され、その度に「私は先の革命には反対だった」と逃げ回る（この人たちをB世代と呼ぼう）。然して、B世代は革命にとっても慎重だ。革命の怖さを知っているから次の革命の担い手に老婆心を働かせ、革命よりも改革を望みがちだ。彼らの子供達は親からそういう教育を受けているから穏健な人が多い。現在35～45歳くらいの人達だろう（この人たちをD世代と呼ぼう）。一方で、もっともラディカルな反体制派は現在55歳近辺のイラン人達ではなかろうか。革命時に彼らは少年少女だった。大人たちが革命を遂げた後、若くしてイラン・イラク戦争の戦地へ赴き、終戦後は経済的な混乱と困窮に見舞われたのは彼らだ（この人たちをC世代と呼ぼう）。彼らの反政府感情はとても激しく、その子供たち（E世代）もまたその急進性を受け継いでいる。世代順に並べると、こんな風になるだろうか。

A 世代 60歳～70歳 急進的体制派

B 世代 60歳～70歳 穏健的反体制派

C 世代 50歳～60歳 急進的反体制派

D 世代 30歳～45歳 穏健的反体制派（B世代の子息）

E 世代 15歳～30歳 急進的反体制派（C世代の子息）

各世代がそれぞれの『革命』を背負って生きている。それが今日のイランだ。

2022年9月、政府によるマハサー・アミーニーさんの殺害を機に発生した大規模な反政府運動の担い手は、上記E世代の女性たちを軸としている。私が今までに見てきたイランの男たちを軸とした従来の反政府運動とは、少し様子が違う。E世代の要求には、従来C世代等が口にしてきた経済的な欲求がなく、単純に自由を希求しているところが私には新鮮に見える。スローガンも単純だ。

「女性（ザン）、生活（ゼンデギー）、自由（アーザーディー）！！」

特に、従来は反政府運動に全く参加しなかった女子高生達が、教科書に印刷された政府指導者の写真を破り、被っていたスカーフを脱ぎ捨て、若い拳を突き上げている様子には、心が動かされる。

一方で、A世代のイラン人はとても保守的である。今のイランの体制は、常にA世代が

他の世代を宥めながら護持されてきた。43年前の革命を成し遂げた誇り高きA世代は、そう易々と既得権益を手放さないだろう。

しかし、明治維新が示したように『革命』は必ずしも血で血を洗うものとは限らないし、ゼロサム・ゲームとも限らない。前体制を護持したまま世の中のルール（コンテンツ）を大きく変えるような改革もあり得るし、前体制を排除しながらも合議的に次の体制を築き上げる事もあるだろう。B世代やD世代が望んでいるのは、こういった『改革』であり、『革命』ではないのかもしれない。

E世代の『革命』を煽るC世代、騒擾を傍観するD世代、心配しながら見守るB世代、そして現体制を護持するA世代……。

それぞれの世代で思い描く絵は違うのだが、現体制に対する不満は間違いなく鬱積しており、それが今年9月からイラン国内のあちこちで爆発しているのは報道の通りだ。（最近の『革命』の様子は下記のURL等に掲載されている写真にてご覧頂けます。）イランがこれからも国であり続ける為には、この不満をどこかに落ち着かせる必要がある。改革か、革命か？もはや現状維持の選択肢はないのではなからうか。

先日イラン料理のレストランへ行くと、私の隣のテーブルは明らかにA世代で、女性達はチャードルと呼ばれる外衣を目深くまとっていた。もう片方のテーブルはD世代かE世代で、女性達は若く、誰もスカーフどころか上半身を覆わねばならないはずのマントさえ着ていなかった。3カ月前はあり得なかった光景である。同じ国の同じ民族が私のテーブルをはさんで全く違う文化を表現している事に違和感を覚えたが、これからのイランはこれでいいのではないだろうか。トルコやインドネシアなど、他のイスラム教国がそうであるように、一国に敬虔な人とそうでない人が共存する事は当然の事ではなくてはいけないと思う。

今後イランでまた『革命』が起きるのか起きないのか分からないが、それは日常的に語られ、そして街中ではそれが試されようとしている。混乱や混沌の多いイランでの生活を心配してくれる方々は非常に多くて、それは有り難いのだが、私は生きた歴史の中にいる事を日々実感している。『革命』を教科書の中に閉じ込め、決してラディカルな変化を希求しない日本人の安寧を否定する積りは全くないが、『革命』と共に生きるイラン人の生き様も悪くはなからう。私は、これからもイラン人が背負うそれぞれの『革命』を見守り、そしてそれらに寄り添ってゆきたいと願い、この駄文を閉じよう。

参考資料：<https://www.bbc.com/persian/articles/cl7dxx9e8zko.amp>

*本稿の内容は執筆者の個人的見解であり、中東協力センターとしての見解でないことをお断りします。